

第二目 我海軍ニ於ケル朱式魚雷採用ノ経緯及發達

二二五

明治十三年頃ヨリ我海軍ニ於テ魚形水雷購入ノ議アリ明治十四年歐洲駐在武官ヨリ歐洲各海軍國ニ於ケル魚形水雷採用ノ狀況竝ニ之ガ採用ノ利點ニ就キ報告(別紙第一)スル所アリ乃チ明治十四年四月不取敢海軍長官川村純義ヨリ獨國駐在青木公使ニ對シ朱式魚雷ニ關シ次記第一號ニ依ル依頼ヲ爲セルニ對シ同年六月第二號ノ回答ニ接セリ

第一號

「ホワイトヘッド、トルビード」水雷英國ニ於テハ其ノ内部ノ機械鐵製ニ付保存方ニ一層注意ヲ要スルノミナラズ五十個已上ヲ求メザレバ賣却不致、然ルニ獨逸ニ於テハ猶改修ヲ加ヘ銅或ハ靑銅製ニシテ頗ル保存方宜敷趣傳承致候右ハ果シテ然ルヤ且右水雷幾個ニテモ買得候哉或ハ定限ノ個數ヨリハ賣却不致儀ニ有之ベキ哉乍御手數該國海軍士官ノ内ヘ其ノ製造ノ巧拙實地ノ如何等御問合之上早々御回報煩度此段及御依頼候也

明治十四年四月十一日

海軍長官

青木全權公使殿

追テ幾個ニテモ買得相成候ハバ一個ノ代價若シ定數有之節ハ其ノ全價モ同時御通報相成度併セテ及御依頼候也

第二號

外第何號附テ以テ「ホワイトヘッド、トルビード」水雷機械一件ニ付云々御申越ノ趣承知候就テハ御申越ノ如ク早速當國海軍水雷課長ニ問合セ候處一體「ホワイトヘッド、トルビード」水雷ハ鐵製ニ付鑄ヲ生ズルノ憂アリ保存甚難シ故ニ當時當國ニ於テハ尙改修ヲ加ヘ青銅ヲ以テ之ヲ製シ因テ生鏽ノ憂無ク保存方ヲ甚ダ便利ナラシム素ヨリ當國青銅製機械ノ英製機械ヨリモ便ナルコトハ論無シト雖何分青銅製ハ鐵製ヨリ代價高キニ付獨逸一般ノ海軍ニ當國製ノ器械ノミヲ用フルヲ得ズ故ニ當國海軍ニ於テハ遠征ニハ必ズ當

國製ノ器械ヲ近征就中海岸等ニハ英製ノ分ヲ用ヒ居リ候趣ニ候又賣却數ノ制限ハ獨製ノ器械モ五十個以上ヲ要シ候ヘ共約束ノ仕方ニ依テハ二十個ニテモ賣却可致趣然ルトキハ二十個ノ代價凡ソ十六萬「マーク」位ト申事ニ有之候尤モ約定ノ仕方次第代價モ幾分カ下直ニ可相成様子ナリ仍テ課長ヨリ聞入候儘申進候云々

明治十四年六月九日

海軍 卿 川村 純義 殿

全權公使 青木 周 藏

之ヨリ先キ我海軍ニ於テハ保式魚形水雷ニ就テモ調査ヲ怠ラザリシノミナラズ當時雇傭中ノ英國水雷術教員等ノ推奨切ナルモノアリ彼此考慮ノ結果保式水雷採用ニ決シ明治十五年八月海軍卿ヨリ太政大臣宛左記上請ヲ爲スニ至レリ

水雷竝ニ電氣燈及「ノルテンライト」砲等代價費用別途御下附ノ儀上請(摘要)

一、水雷ハ水戦ノ軍器中必要ナル利器ニシテ海外各國ノ海軍ニ於テ之ヲ備ヘザルハナシ中ニ就テ其ノ製ノ最モ精良ニシテ且銳利ナルハ英國製ノ「ホワイト、ヘッド」ノ魚形水雷ニ如クモノナシ此ノ水雷ニテハ大小ノ二種アリ大ナルモノハ長サ十九呎小ナルモノハ長サ十四呎六吋ナリ如之水雷ハ我海軍ニ於テ最モ不可缺ノモノニシテ此ノ際至急英國(註文致度然ルニ右水雷ハ五十個以上ニアラザレバ註文ヲ受ケザル成規ニ付大小各二十五個合セテ五十個註文ノ見込ニテ右代價合計凡洋銀十七萬三千三百三十三弗餘ニ可相成但右五十個ノ代價ハ註文ヲ爲シタル年ヨリ四箇年ノ割合ニ皆済スル見込ニテ算定セルモノニ付比ノ際急製ヲ命ジ候ハバ幾分相増可申將タ運賃保險料ノ如キハ此ノ外ニ相成豫メ計算モ難立候得共巨額ニハ有之間敷又其ノ使用法秘密傳習料トシテ洋銀四萬二千六百六十弗餘ヨリ五萬三千三百餘弗ヲ要シ候ヘ共彌々約定致ス場合ニ至リ候得バ幾分カ相減シ可申又此ノ際右使用方傳習兼テハ製造方監視ノ爲兩三名英國へ派遣爲致候ハバ大ニ利益可有之尤モ其ノ中兩名ハ在英國海軍生徒ノ内ヲ以テ充テ候ハバ其ノ費用モ相減可申見込ニ有之候

二、電氣燈ハ海軍ニ於テ夜間ノ最要ナル器ニシテ敵ノ接近ヲ遠隔ノ地ニ發見シ又遠距離ノ艦船ニ通信スル等ノ用途ニ必須不可缺ノ

モノニ候處我海軍ニ於テハ僅ニ一兩基アルノミ故ニ此ノ際右電氣燈十臺至急注文致度此代價(以下略)

三、「ノールテン、フイールト」砲ハ水雷防禦ノ爲是亦必要ノ器ニシテ此ノ際十門並ニ彈藥共注文致度此ノ代價(以下略)

右等ノ費用總額ハ大凡洋銀三十萬弗許ニ相成之皆當省ノ經費定額外ニ係ルテ以テ別途御下附相成度尤モ右支出方ノ儀ニ付豫メ大藏卿(商議候處三十萬弗許ニ候ハバ支出方差支ナシトノ儀ニ付洋銀三十萬弗此ノ際打切り御下附相成候ハバ運費保險料一切ノ雜費ハ此ノ金額ノ中ヲ以テ支辨可致見込ニ候條右至急御許可相成度此旨上申候也

明治十五年八月十八日

海軍卿 川 村 純 義

太 政 大 臣 三 條 實 美 殿

追テ水雷註文ハ差急ギ候儀ニ付在獨國伊藤參議、青木公使ニ先ヅ電信ヲ以テ依頼致度候條何分ニモ至急御許可相成度
右ニ對シ左記指令アリタリ

上請ノ趣聞届候事

但決算ノ上殘金ハ返納候儀ト心得ベシ

明治十五年八月二十三日

乃チ我國ヨリ差當リ佛英ニ派遣シ傳習註文竝ニ製造監督ニ從事セシムトセシモ佛英當事者等ハ特許料ヲ保社ニ仕拂ヒ居ルヲ口實トシ我要求ニ應ズルノ色ナク茲ニ保式魚雷註文ハ中絶セララルニ至リシガ(別紙第二參照)偶々明治十五年前後海軍少佐黑岡帶刀獨國ニ在リ朱式水雷購買ノ有利ナルヲ報告シ青木公使ト共ニ當局ニ報告スル所アリ遂ニ十五年十二月ヲ以テ高田商會ヲ經由シ朱社ニ對シ朱式水雷五十個ノ註文契約ヲ爲スニ至レリ別紙第三、四ハ這邊ノ經緯ヲ詳述スルモノナリ該註文水雷ハ十七年

ヨリ十八年ニ互リ第二回註文(十七年六月)ノ五十個ハ十九年中ニ各着邦シ爾後引續キ之ガ註文ヲ爲セ
ルモノナリ

然ルニ明治二十年海防艦(松島級)兵裝決定ニ當リ備教帥佛人「ベルタン」ハ發射術上ヨリ又魚雷ノ強度
上ヨリ從來ノ朱式水雷ノ不可ニシテ保式水雷採用ノ有利ナルヲ忠言セルニ對シ兵器會議ニ諮問スル所
アリシガ同年五月同會議ハ左記ノ如ク上答シ依然從來ノ朱式水雷採用方針ヲ繼續スルノ可ナルヲ以テ
セリ茲ニ相當有力ナリシ保式水雷採用説モ中止セラレタリ

因ニ記ス叙上魚形水雷ノ採用及註文ニ就テハ獨國駐在全權公使青木周藏、外務大臣井上馨及當時恰
モ歐洲巡遊中ナリシ參議伊藤博文等ノ間接直接ノ協力斡旋ニ據ルトコロ尠シトセズ

水雷發射管改良ノ議案上答

尊第一一二號ヲ以テ第一海防艦へ裝置スベキ水雷發射管ニ因由シ「ベルタン」氏提出ノ意見書添ヒ保式水雷購入使用ノ利害得失議案
御下付ニツキ審議ノ末已ニ水雷ヲ船側高所ニ裝置スルノ點ハ「ベルタン」氏意見ノ通議シ先ニ具申仕候其節朱社へ實議ノ件モ併セ
テ上申仕置候處追々右回答ヲ了シ今般再議仕候元來朱氏水雷ハ我海軍ニ採用スル已ニ數年ニ及ビ其ノ製造準備モ稍々整ヒタル今日
ニシテ俄然之ヲ保氏水雷ニ改造スルノ得失ハ第一經濟ニ於ケルモ第二製造方法ニ於ケルモ第三取扱上熟練ニ於ケルモ何レモ朱氏水
雷ノ得點ニシテ其ノ數鮮少ナラズ然レドモ其ノ効用上保氏水雷ノ堅牢ニ不及唯其ノ構造脆弱ノ止ムヲ得ザルニアリ然ルトコロ今回
該社ノ回答ニ由ルニ船側三米ノ高所ニ設置發射シ充分強固ナル水雷ヲ製出スベキ旨ヲ報道ス未ダ其ノ實驗ヲ試ミザルモ再應ノ來狀
ニ信憑ヲ留メ保氏水雷ヲ不利トシ所謂強固ニ製造スベキ朱式水雷ヲ採用スルコトニ決議候條別紙御下付ノ書狀返進竝ニ決議要領相
添此段上答仕候也

明治二十年五月三日

海軍次官殿

兵器會議決議書

兵器會議 々 長

二二九

一、朱社萬答等ヲ參看スルニ船側高所ニ設置發射シ得ル強固ナル水雷ヲ裝造スベキ趣ニ付議題中保氏水雷ハ採用セズ右答書ノ通充分強固ニ裝造セル朱氏水雷ヲ採用スベシ

二、前項ノ可決ハ書狀ニ根據ヲ留ムルモノナレバ該註文ニ當リテ水雷ノ速力寸度其ノ他之ヲ設置スル船側ノ高尺本艦ノ最大速力等ヲ商量シ詳細ニ要點ヲ指示スルヲ要ス

前記朱式水雷ハ八十四年式ト稱セラルルモノナルガ我國ニ朱式八十八年式魚雷ヲ輸入セルハ明治二十年ニ屬シ漸次本魚雷ヲ以テ舊魚雷ニ代ユルニ至レリ而シテ兩種魚雷能力上ノ差異ヲ示セバ次ノ如シ

能力 / 魚雷	八四式	八八式	備考
駛走力	四〇〇米 二二節	四〇〇米 二六節 八〇〇米 二二節	八八式ニハ浮遊器ヲ有スルモノト發動飯ヲ有スルモノトノニアルモ其ノ能力ハ同一ナリ
裝藥量	二〇斤	五七斤	

要スルニ當時ニ於テ該魚雷ノ特長ナリトシテ誇稱セル諸點ハ前項第一節第二項第三目ニ記セル如クナ
ルガ魚雷兵器ノ用法及保式魚雷ノ進歩トニ依リ比較的迅速ニ既採用諸海軍國ヨリ其ノ影ヲ沒スルニ至

レリ(獨國ヲ除ク)

(備考)明治十七年十月三日最近獨國ヨリ舶着セル朱式魚形水雷ヲ皇片廣場ニテ天覽ニ供シ川村海軍卿等之ガ説明ニ任セリ

別紙第一

魚雷ノ趨勢ニ關スル駐外武官報告(明治十四年)

英佛獨奧意普六國ハ先キニ英國機械師「ホワイト」氏發明ノ魚形水雷ヲ採用スル權義ヲ購求シ而シテ英國ノ如キハ一萬五千封度ヲ以テ該水雷ヲ用フル特權及其ノ圖面ト見本トテ購求シタリト云フ

英國ハ「ウールリツチ」武庫ト「シャネース」海軍港ニ於テ意國ハ「ベニス」ニ於テ獨國ハ「ヒューム」(發明者ハ茲ニ製造所ヲ設ク)ニ於テ佛國ハ「シヤラント」ニ於テ獨國ハ北海ニ於テ該水雷ノ使用及製造方法ヲ研究ス獨逸政府ニ於テハ洋中彼我ノ船艦五ニ動搖スルトキ水雷ノ効果如何ヲ研究セン爲水雷演習船「ジイテン」號ヲ製造シ且七萬三千封度ヲ以テ該水雷ノ海上實驗ニ充テタリ而カモ又三萬千封度ヲ以テ將來ノ水雷試驗費ニ充テントスト云フ「ジイテン」號ハ龍骨線上ノ前後ニ兩水雷管ヲ備ヘ魚形水雷ヲ射出スル船ニテ長さ二二六呎深サ一八呎六吋、積載吃水一一呎八吋千八百七十六年六月英國「テームス」川製鐵所ニテ製造セルモノナリ

抑モ外裝水雷艇ヲ以テ敵艦ヲ襲フニハ十碼、「ハーバー」氏小形水雷ヲ以テハ五〇碼ノ距離ニ接近セザルヲ得ズ「ホワイト」氏水雷ノ如キハ三百乃至四百碼ノ距離ヨリ敵艦ヲ狙射スルヲ得テ船艇及乗組人員ノ保安上ニ於テモ莫大ノ利益アルモノナリ

別紙第二

明治十六年一月二十六日

若山 鈺 吉 殿

海 軍 卿

1111

保式水雷ノ購入ヲ取止メ朱式水雷ニ代フルノ議

先般其ノ官派遣ノ節保氏水雷購入ノ儀ニ決定候處該水雷ノ儀ハ「リード」氏ノ報告セシ如ク五〇個以上ノ注文ニアラザレバ製造セズ且祕密傳習料七、八萬弗程ヲ要スル由ニ付多分ノ費用嵩ム處朱式水雷ノ方ハ之ニ反シ幾個ニテモ注文ニ應ジ製造シ且祕密傳習料ヲ要セズ保社ヨリ便利ニシテ經費モ減少ニ付朱氏水雷購入ノ事ニ相決シ候條右ノ理由詳細伊藤參議へモ申開キ致置相成度此旨相達候也

別紙第三

朱式水雷採用ニ關シ黒岡少佐手書（明治十五年九月一日）

明治十五年九月一日川村海軍卿ヨリ電報ニテ伯林ニ赴キ伊藤參議院議長ニ協議シ軍備ノ事ヲ取計方ノ命アリシ故龍動ヲ發シ伯林ニ向ヘリ伊藤議長ハ憲法取調用ニテ伯林ニ滞在セラレタルヲ以テ一時内閣ノ代表者ニ充テラレ臨時ノ軍備ニ干與セシメラレタルナルベシ然レドモ朝鮮事件ハ平和ニ歸シタルヲ以テ急ニ處理スルノ必要ハ止ミタリ（帶刀ハ此際「ステツチン」ノ造船所ニテ定遠鎮遠ヲ實視シ「クルツプ」ニテ製砲ヲ視察シ報告セリ）故ニ九月四日ハ伯林ノ朱氏魚形水雷工場ヲ視察シ清國及獨乙等注文ノ魚形水雷製造ヲ視察セリ當時我海軍ニテハ奧國魚形水雷（「ホワイトヘツド」）ヲ採用スルニ決シ若山技師ヲ歐洲ニ派遣セリ若山ハ佛國ニ至リ改良魚形水雷ヲ視察セントセシモ機密ニ屬シ要領ヲ得ズ尤モ英國モ特許料ヲ「ホワイトヘツド」ニ仕拂ヒ自國ニテ改良ヲ加ヘ祕密主義ヲ

別紙第四

明治十五年十二月二十四日

高田商會代理

細谷要太郎

黒岡帶刀殿

守リ他ニ示サズ故ニ帶刀ハ伯林ニテ獨乙政府採用ノ魚形水雷ヲ視察シ五十個以上モ購買スレバ祕密金ヲ要セザルヲ知り青木公使ト連名ニテ伯林ヨリ海軍卿ニ其ノ採用ヲ勸告セリ九月二十日過ニ井上外務大臣ヨリ青木公使ヘ該水雷ハ貴官等ノ勸告ニ基キ購買スルコトニ決セリトノ海軍卿ノ訓令ヲ電報アリタリ然ルニ高田商會ハ偶然ニモ同社ノ代理店タルヲ以テ之ニ購買方ノ命ヲ發セリトノコトナリシ八月三十一日附テ以テ川村海軍卿ハ私信ニテ昨年已來海軍興振ノ議アリシモ行ハレズ今日ニ至リ軍艦増加ノコトハ政府ニテ決定セラレタリト是帶刀十四年赴任後屢々列國海軍擴張ニ伴ヒ我國ノ擴張ヲ建議セシモ返事無ク初メテ茲ニ返信ニ接セシ次第ナリ

以書面申上候陳者朱氏水雷器漸ク昨今定約ノ手順ニ相成一昨日右草案製造人ヘ相渡申候兼テ海軍省ヨリ御下附相成分當地全權公使費下ニ於テ御加筆相成候處製造人ヨリモ二、三箇條訂正相願出候間四、五日ノ内ナラテハ記名仕兼候儀ト奉存候水雷器ハ四十二個海軍省ヨリ御註文相成候處五十個御註文相成候ハバ一個ニ付五百馬克値引可仕旨製造人ヨリ申出候ニ付其ノ旨公使費下ヨリ電信ヲ以テ日本ヘ照會相成此四、五日前ニ漸ク御返事到着仕候折柄延引相成申候全數五十個御註文相成候事ニ決定仕候間此段申上置候射管及水雷砲等ノ儀ハ御備可相成艦船ノ形狀ニヨリ製造相成不申候テハ實地不都合ニ有之候旨製造人ヨリ申出此一義ハ若山技師殿ヨリ海軍省ヘ御問合相成可申答ニ御座候尤モ此ノ附屬品ハ水雷器ト同時ニハ必ず出來可申候間御問合セノ上可然品出來相成方御利益ト奉存候案内旁々如斯ニ御座候

追テ約定書ハ記名ノ後貴覽ニ入レ可申候也